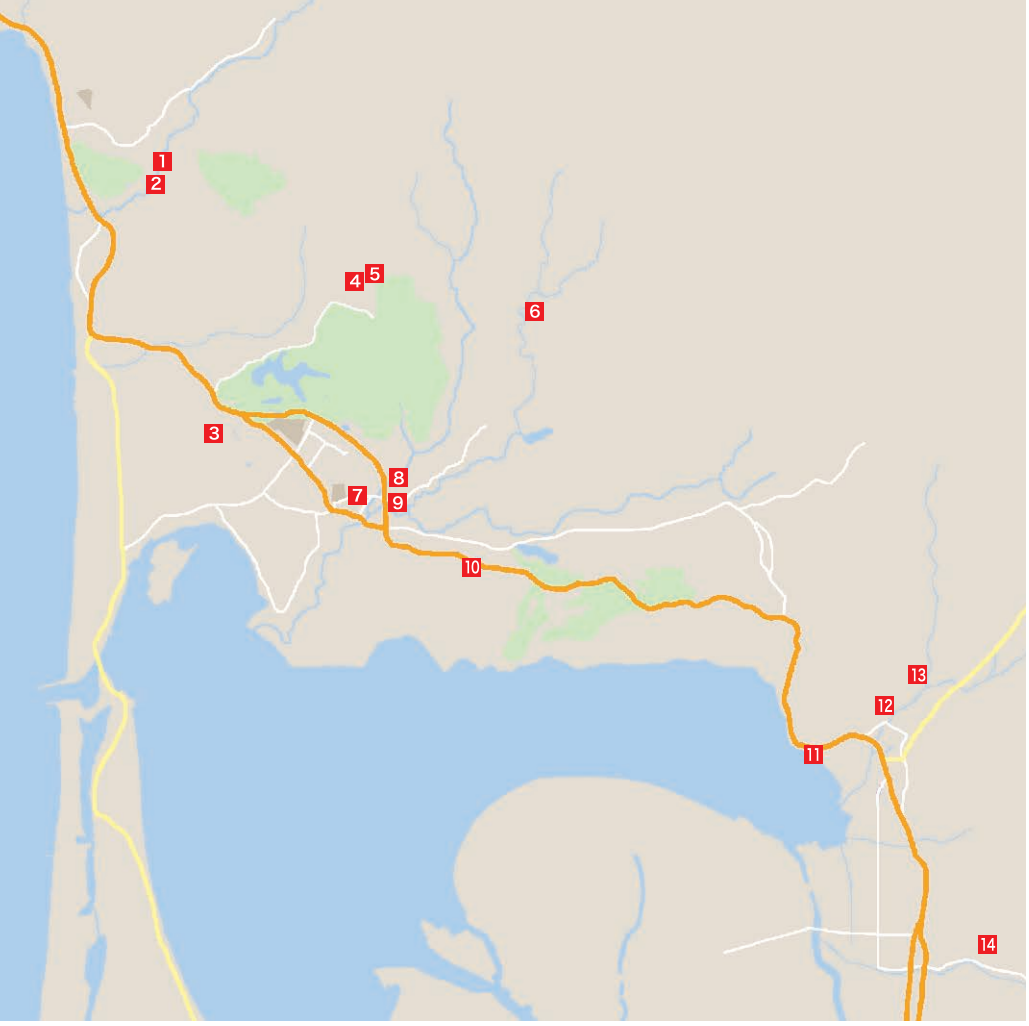

古館遺跡 1

磯松集落北東、磯松川左岸の丘陵上に立地する平安時代集落・中世城館。「フン館」とも称されます。空壕で区画された3つの平場から構成され、従来中世城館とみられてきましたが、平成4年(1992)市浦村教育委員会によって試掘調査が行われた結果、平安時代の遺構・遺物が主体的に出土し、古代防御性集落の可能性が高くなりました。また、中世の珠洲擂鉢が出土しているとともに、現在磯松墓地に安置されている五輪塔も、本遺跡の近くにあったとされていることから、中世城館として再利用されたとも考えられます。

磯松の一本松 2

五月女萢遺跡 3

十三湖北岸の低地に立地する縄文晩期集落。昭和56年(1981)市浦村教育委員会によって発掘調査が行われ、縄文晩期の亀ヶ岡式土器をはじめ、石器・石製装身具・獣骨、製塩土器などが出土しました。平成17年(2005)・平成19年(2007)～現在、五所川原市教育委員会による調査が継続しており、縄文人骨を伴う大規模な土坑墓群をはじめ、シジミを主体とする貝塚、縄文時代後期末葉より晩期後葉に至る遺物ほか、弥生時代後期の続縄文土器や奈良時代の土師器なども見つかっています。

唐川城跡 4

十三湖北岸の独立丘陵上に立地する平安時代の防御性集落・中世城館。巨大な空壕で区画された3つの郭や井戸跡が認められることから、従来中世豪族安藤氏に関連するが、富山大学による試掘調査の能性が高まりました。平安時代師器・須恵器、北海道起源の擦文土器、羽口や鉄滓など鉄生産関連遺物が出土しました。中世陶磁器も出土していることから、安藤氏と南部氏の抗争が激化した室町時代前期には、臨時的な中世城館として再利用されたとも考えられます。

春日内観音堂 5

津軽三十三観音17番札所。

山王坊遺跡(伝阿吽寺跡;日吉神社) 6

山王坊川右岸の谷間、現日吉神社境内に広がる中世寺社跡。山王坊遺跡調査団・五所川原市教育委員会などによる発掘調査によって、日吉山信仰に伴う社殿列跡や、伝阿吽寺跡とみられる大型の仏堂ほかが検出されました。阿吽寺は、十三湊の繁栄を描いた文書『十三往来』『十三湊新城記』に登場することで知られ、『十三往来』では「阿吽寺之鐘之声成諸行無常告」と記されています。これらの遺構群は、出土遺物から十三湊の盛衰とほぼ一致することから、安藤氏と関連する神仏習合の宗教施設と考えられています。

蓮華庵石塔群 7

現在蓮華庵に安置されている板碑・五輪塔・宝篋印塔などの中世石造文化財については、もともと山王坊・春日内観音堂(龍興寺跡)周辺にあったとされます。これらの造塔時期はおおむね14世紀後半から15世紀前半、十三湊の最盛期に相当することから、安藤氏と関連する宗教施設にあった石塔群と考えられます。なお蓮華庵は、もともと山王坊川上流にあったものが、正徳元年(1711)現在地に遷されたと伝えられます。

蓮華庵如来立像 7

吉田松陰遊賞碑(蓮華庵) 7

笹畑貝塚 8

オセドウ貝塚の対岸、山王坊川右岸丘陵に立地する縄文貝塚。大正14年(1925)東北大学長谷部言人・山内清男山内清男によって発掘調査が行われ、オセドウ貝塚とともに「円筒土器」命名の契機となる土器が発見されました。昭和3年(1928)には中谷治宇二郎によって発掘調査が行われている。また、付近は「寺屋敷」と称され、かつて五輪塔や鏡、珠洲焼壺なども出土したとされます。

オセドウ貝塚 9

相内川左岸、神明宮社地となっている丘陵部一帯に広がる縄文貝塚。大正12年(1923)の人骨出土を契機として、同14年東北大学長谷部言人・山内清男が発掘調査を行いました。出土土器は後に「円筒土器」と命名されるとともに、「上層式」と「下層式」に分けられ、北日本を代表する縄文土器に位置付けられました。以来縄文時代前・中期の貝塚として知られるようになり、中谷治宇二郎、吉田格・長良信夫ほかによって調査が実施されています。また、平安時代の土師器・須恵器、北海道起源の擦文土器、中世陶磁器なども発見されています。

福島城跡 10

十三湖北岸の台地上に広がる平安時代集落・中世遺跡。中世豪族安藤氏の居城とされ、一辺約1kmの三角形を呈する外郭、一辺約200mの方形を呈する内郭の二重構造からなる城館と考えられてきました。昭和30年(1955)東京大学東洋文化研究所による発掘調査を皮切りに、国立歴史民俗博物館・中央大学・青森県教育委委員会等によって調査が行われました。その結果、外郭土塁・堀跡・内郭等の造成は、安藤氏の最盛期に相当する14世紀後半から15世紀前半であることが推定されました。また内郭や十三湖岸近くの「鰊崎」地点では、平安時代の竪穴住居跡ほかの遺構も検出されており、その歴史が古代に遡ることも明らかとなっています。

吉田松陰遊賞碑 11

幕末の志士吉田松陰が当地を訪れたことを記念して、昭和6年(1931)建立されました。徳冨蘇峰題字、守屋磨瑳夫碑文、久保木保寿書。初代碑は、昭和30年代道路拡張工事中に倒壊破損しましたが、、その後修復され相内蓮華庵に再建されています。風化が進んだ二代目碑(昭和39年建立)にかわって、平成4年(1992)建立されたのが現在の碑です。三代目碑は、初代碑を忠実に復元したものですが、石材は黒御影に変更され、建立地点も500メートル程南側の現地点に移動しています。

安倍太郎屋敷 12

小河川沿岸の丘陵上に立地する古代防御性集落・中世城館群。空壕跡などの施設が認められることから、従来中世城館と考えられてきましたが、平安時代の土師器・須恵器、北海道起源の擦文土器などが出土していることから、成立は平安時代の「防御性集落」に遡ります。14世紀後半～15世紀前半の陶磁器も出土していることから、安藤・南部氏の抗争が激化する室町時代前期、臨時的な城館として再利用されたと考えられます。

今泉観音堂 13

津軽三十三観音16番札所。本尊千手観音。寛文9年(1669)唐崎山(現賽の河原)に建立されました。幕末には飛龍大権現を祀る飛龍宮となりましたが、明治6年(1873)神仏分離令により神明宮を分離、堂社は取り壊されましたが、明治8年(1875)現在地に再建されました。

御詠歌「むかしより有とも知らぬ今泉　千年の影ぞ有明の月」

薄市観音堂 14

津軽三十三観音15番札所。本尊千手観音。元禄元年(1668)創建とされますが、貞享4年(1687)薄市村御検地水帳に「観音堂地　堂建之有」とみえることから、それ以前の創建と考えられます。幕末には飛龍大権現を祀る飛龍宮となりましたが、明治維新後観音堂に復しました。

御詠歌「まんまんと眺めにあかぬ十三の潟　千里をここに待観世音」